令和５年度　第３回　京丹波町子ども・子育て審議会
議 事 概 要

日時：令和６年３月１日（金）　午後１時１５分～午後３時３０分
場所：京丹波町役場２階　大会議室
出席委員：１２名
欠席委員：６名
講演参加者：６名

１　会長あいさつ（明田会長）

会　長：本日は佛教大学副学長の原教授にご講演いただく。（以前審議会の委員を務めていた）令和３年度の審議会でも原教授のお話をうかがったことがあり、その時の演題が「コロナ禍の生活が子どもに与えている影響」だった。その内容もさることながら、原教授のやさしく、ユニークで親しみやすい人柄にファンになった。前回の講演で原教授は「京丹波町の里山の風景や人、子どもたちも大好きだ」と何度も口にされていた事が心に残っている。私自身も京丹波町を大切に思い、親しみやすいところだと自信を持って暮らしていこうと心がけてきた。第２回目の審議会では、委員のメンバー一人一人が子どもたちのために何ができるかというテーマでグループワークを行った。その時にメンバーの一人一人にたくさんの意見や思いを発信してもらった。すぐに実現できなくとも、すぐに形にならなくとも、第３期子ども・子育て支援事業計画に盛り込んだり、これからの審議会を運営するにあたってエネルギーをいただいたと思っている。今後とも皆様のご協力で審議会が盛り上がるよう、お願いしたい。

２　講演

テーマ：ポストコロナの時代を生きる子どもたち
講師：佛教大学副学長　原 清治教授
■講演の概要

【京都府の子どもたちの現状】

・先日、京都府北部に講演に行った際、子どもたちと話をしたところ「京都駅や河原町は人が多すぎるので二条駅の周辺で遊ぶ」と聞いた。京都府の北に行けば行くほど、都会の風景を違和感と感じる子どもが多い。
・京都府北部で育った子どもたちも、当然のことながら進学するにしたがって人間関係の幅を広げて社会適応していく。ただ、コロナの影響で今の子どもたちは人と向き合うことができていない。人間同士の関係性を作るということが、この３年少しの間で非常に脆弱になっている。

【最近の若者（学生）について】

・大学生の間では、出会ったら「よっ」と挨拶するだけの関係を意味する「よっ友」が急増している。相手のプロフィール（情報）を知らないので、「よっ」の挨拶の後にコミュニケーションが続かず、相手との距離を縮められない。コロナの影響で、今の若者はコミュニケーションに必要な他者の情報を得る機会を失ってしまったのが大きな要因。

・トイレで過ごす大学生も多い。コロナの影響で、他者の中にいることや一緒にいること自体に疲れてしまうので、１０分でもいいから人との接触を切るためにトイレにこもりたいと考える。小中学生も同様で、リビングに家族がいるのに、自分の部屋で過ごすようになっている。子どもたちが他者と接触する頻度が落ちてしまった。このままいくと、子どもたちはそれぞれで孤立してしまう。

【コロナ禍での子どもの体験活動について】

・コロナ感染防止のために文化祭や体育祭、修学旅行を中止してしまい、子どもたちは教室以外での「非日常」における自分の姿や、友達の姿を見ることができなかった。運動会で足が速かったり、合唱コンクールで上手に歌ったりする友達の姿を見ていない。そうすると、友達とコミュニケーションをするための話題がどんどん減っていく。今の子どもたちは体験活動が減ったために、他人と関係を構築する機会が失われている。

・京丹波町ではコロナ禍でも小中学校やこども園の行事を継続していたのか調べてみると、延期や規模の縮小はあったが、継続をしていた。「やろう」という声に賛同する人が多いのは、やった方がいいんだろう、子どもに体験させた方がいいんだろうと、行事の意義を薄々ながらでも地域で共有しているから。中止せずにやるんだという「根性」は地域が持っている力で、資源だと思う。

【体験活動の種類と発達への影響について】

・小学校に入る前に自然体験や文化体験をした子どもの学力が上がるというデータがある。コロナ後に子どもに何をさせたらいいのか、というのがこれからのポイントになっていく。体験というのは自然体験、社会体験、文化的体験の３種類ある。

・自然体験をするほど、自尊感情が上がり、外向性が上がる。それなのになぜ、山や海の自然が豊かで、たくさん自然体験をしているはずの京都府北部の子どもたちは、他者と関わろうとする外向性が弱いのか。それは、子どもたちが自然を十分に使って体験していない、自然があることがいいことだと思っていないから。せっかく自然豊かな京丹波町に育っているのに、それを呪わしいと思っていると体験の効果がなくなってしまう。

・社会体験は、お祭りやボランティア、就業体験のことで、学校や勉強が楽しいということが分かるようになる。文化的体験は、休日に遊園地や美術館、博物館、コンサートに行くことで、将来に対して前向きになり、将来に何をしたいかが明確になる。京都府の子どもの特徴の１つとして、学力が高く、好きなこともあるのに、将来何をしたいか、何になりたいかという思いが弱い。京丹波町でも同じことが言えるのではないだろうか。

【京丹波町の子育て環境について（アンケートの中間集計などから）】

・京丹波町は、京都市に比べて学校や人間関係が小さい。保護者や地域の中には、こども園から小中学校までずっと人間関係が変わらないのはよくないことだと考えている方がいる。それを口に出して子どもに伝えると、子どもはどう感じるか。逆に「京丹波町でよかった。自然が豊かでお互いのことをよく知っている集団がずっと友達同士でいるところは貴重だ」と伝えるのとどちらがいいか。大人や先生が地域に対してネガティブな言葉づかいや態度をすると、子どもは地域を嫌いになり、郷土愛が失われていくという研究がある。

・異年齢の子どもとの交流をすることも有効で、小さいころから異年齢の子どもと一緒に遊ぶだけで、自尊感情や外向性にプラスの影響がある。こども園や小中学校でどんな工夫をすればいいのか考える際の重要なポイントで、地域のおじいさんやおばあさんと関わることも、同様の効果がある。

・アンケートによると、京丹波町の子どものあそび場は、公園や路地・空地、親族の家などもあるが、自宅が圧倒的に多い。京都市でも京丹波町でも同じデータになる。自然豊かな京丹波町の良さが出ていない。

・京丹波町の子どもと地域とのつながりを見てみると、祭りや地蔵盆などの伝統行事は子どもたちの外向性を育む重要な社会体験だが、祭りに半分以上の子どもが参加している京丹波町のような地域は貴重なので、やるべきだと思う。「あれはおじいさんおばあさんがやっていること、もうすぐなくなる」と思っている若いお父さんやお母さんが多いかもしれない。そのような価値観を変えていく必要がある。

・京丹波町の子育て中の悩み事は非常に重要な項目で、「子どもの教育や将来の教育費」が最も多かった。就学前の保護者の悩みは食事や栄養面、子どものしつけに悩んでいることが分かり、小学生になるにつれて病気や発達、こどもとの接し方や友達付き合い、いじめにあわないかなどに変化している。しかし、就学前も小学生も「子どもの教育や将来の教育費」が一番の関心事なのは変わらない。それに応える施策を打っているのか、検討しているか、考える必要がある。京丹波町で子どもが教育を受けていくことについて親が何を不安に思っているのか、審議会でも話し合ってもらいたい。

・京丹波町の子どもは、いつも一緒にいる子とは仲がいいが、グループ外だったり別の学校の子どもとは付き合わない傾向がある。同じクラスでも「友達・友達でない」と区別をしている。みんなで一緒になにかをしようという発想が欠落し始めている。仲のいい人がいるからそれでいいのではなく、子どもたちが小さな集団をまとめてグループとして考えられるようにしたり、普段話さない子ども同士が話をして協力していけるように、ポストコロナを生きる子どもたちに対してしっかりとサポートしていかないといけない。

【「社会関係資本」について】

・人や地域との関わり、人間同士が生み出す力を「社会関係資本」という。また、「学校って面白い」と肯定的に感じることを学校適応というが、小学校の時に保護者が学校に関わっているかどうかが、この二つに大きな影響を与える。

・子どもたちに大人の姿を見せることは重要で、地域総がかりで子どもを育てるということにつながる。例えば子どもが蹴ってへこんだ壁や壊れたドアを、子どもの授業中に子どもに見えるように保護者が修理したり、子どもに踏み荒らされたビオトープを近所のお年寄りがきれいにして「みんなで育てましょう」と看板を立てたりすると荒れなくなった。母親がペットボトルに銀紙を巻いて花をさして、トイレの壁に置くだけで、それほど間を置かずに壊されなくなったという話もある。社会総がかりで地域、家庭、学校が連携するのが重要。

副会長：京丹波町ではコロナ禍でも工夫して学校行事を続けていたことを、原教授に褒めていただいた。そういう京丹波町ですらスマホやタブレット、ＳＮＳを下校してから寝るまでずっとやっている子どもが多いと聞く。そのような子供たちが抱える課題を改善するためには私たちがどうすればいいのか、審議会で検討していくヒントになった気がする。みんなそれぞれ心の中に落ちたと思うし、今後の審議やそれぞれの所属で生かしていけると思う。

３　講演に関する委員からの意見

・自分自身も「こんな田舎」と子どもたちに言うことがあった。刺さる部分がいくつもあり、反省しないといけないと思うことがたくさんあった。

・私は京丹波町で町で生まれ育ってきた。縦割り班は田舎の特徴なのだと初めて知ったし、子どもたちにとっては良いことだとも知ることができた。教育費は家庭の問題でもあると考えていたが、町でも考えられるといいと思う。また、子供の将来を考えると、部活や習い事など、子どもが選べる選択肢が少ないことが、個人的には悩みだと思う。

・京丹波町にはたくさんの良い面があること、いい環境で子育てしていると改めて感じることができた。

- 教育のこと、教育費に関することが悩んでいらっしゃる方が多いことについて、自分自身も共感できた。私も４人の子どもがいるが、私立の大学などに通わせると、家計が大変になる。年に２回の学費の支払いが４年間続く。高校を卒業してからの教育費の不安は、誰もが持つものだと思う。子どもが卒業した今となっては「喉元過ぎれば～」と感じるが、今まさに子育てしている保護者やこれから子育てを考えている皆さんにとって、人生の不安であることは間違いないだろう。子どもの数が減っていく要因になっているかもしれない。その不安が除ける方法を審議会で考え、実現できたらいいと思う。
- 学校の現状や課題など、学校関係者には耳の痛い話もあったが、幸い京丹波町ではそこまでの状況にはなっていないのではないかと思う。保護者へのアンケートから見えてきた新しい特徴として、保護者と学校とのつながりがどんどん減ってきているのが分かった。保護者が悩みを相談しようと思われても、学校の教師にも勤務時間があり、学校の電話の応答時間は限られている。勤めておられる保護者だと相談ができないし、学校側も相談に乗りたくても時間の制約がある。社会のシステムを変えていかないといけない課題だと思う。審議会のような機会で、様々な方と一緒に意見を出し合いながら、見通しを持てるような意見を共有できればと思う。
- 私自身も子どもが６人いるので、教育費に関する大変さもあるのがわかるし、今も卒業の時期で忙しくしている。身近な話題として楽しく聞かせてもらった。
- 子どもの教育や教育費に関する悩みがトップと聞いたが、私もアンケートでその選択肢にチェックした。大学の学費の負担などについて先輩のお母さんから聞き、うちは大丈夫だろうかと考える親は多いと思う。しかし、京丹波町は医療費が無償だったり、就学援助もあったり、手厚く支援いただいていると思う。そういった面では教育費について助かっている。将来に対する漠然とした不安という面が大きく、このような結果につながっているのではないかと思う。
- アンケートでは、子育ての相談相手に「近所の人」と答える人が少なかった。自分自身のことを振り返ってみても、田舎の煩わしさを感じることがあった。必要なこと以外は接触したくないという気持ちが若い人にもあるので、近所の人に頼らなくなってしまっているのかもしれない。京丹波町のような小さな社会なので、意識を変えていけることがあるかもしれない。教育費に関して、町としての負担が大きくなるかもしれないが、より良い支援についても審議会の中でも考えていきたいと思う。アンケート結果を改めて示してもらえると思うので、その際にはまたみんなで出来ることを考えていきたい。

- コロナが５類に移行し、様々なことが緩和されて会議や行事等もだんだんと再開されるようになった。学校では１年生から６年生まで一緒に参加する行事も再開され、低学年の児童が高学年の姿を見たり、直接指導を受けたりするような機会が増えてきた。上の子どもとのコミュニケーションをとることが本当に大切なことだと教育の現場で見せてもらった。支援学級の児童が増加しているが、クラスの中では支援員さんに守られながら指導を受け、通常学級の児童と一緒に学んで、成長速度や性格に合わせた指導や見守りを行われていることを参観の際には見せてもらっている。家庭の事情もあるとは思うが、子どもの学校での様子を知ってもらえたら、子どもへの声のかけ方が変わってくるだろうと思う。先生と保護者が話す機会が少なくなっている中で、保護者から交流会の開催を提案して、話す機会づくりをされていることも聞いている。コロナが明けてこれから前向きに進んでいけるように、審議会でも協議していければいいと思う。
- 私は昭和の人間なので、「お母さんはこう思う」「お母さんの考えはこう」と、子どもと距離をとりながら子育てをしてきた。しかし、Ｚ世代と呼ばれる若者たちは、自分の意見が合わない、意見が伝わらない場面では譲歩していくことや、相手がどう思っているのかを聞き出すことに努力が必要な世代であると感じている。コミュニケーションの方法を模索し、疲れてしまうこともある。若い世代、特に子育てをしている保護者がどのような思いを持っているのか、話を聞いていきたい、寄り添っていきたいという思いがある。そのための手だてが掴めていない面もあるけれど、思い、願いとしてはそう思っている。

４　事務連絡（次回予定）

【次回（令和６年度第１回）審議会日時】令和６年５月の予定

５　閉会あいさつ（藤田副会長）

副会長：講演をずっとうなずきながら聞いていた。私たちが考えて、行動するヒントが含まれていたと思う。次回の審議会は新年度の５月になるが、所属によっては交代される委員がいらっしゃることを残念に思う。子育て最中の保護者の委員からは率直な意見や思いを語っていただき、大変参考になった。次回から第３期子ども・子育て支援事業計画に関わる内容についての検討に入っていくと思う。アンケート調査の結果をもとに審議していくが、まずは第２期の計画をもう一度読み直してみたいと思う。この５年間でどれくらい達成できたのか、町民の実感としてどこが見えているのかもう一度捉えて次の会議に臨みたい。来年度もどうぞよろしくお願いしたい。